



立秋が過ぎ、暦の上では秋になりました。今年度もなかなか秋らしくならないと思っていました。こどもたちに、『今』の季節を問うと、小学生も中学生も「秋とは思えない」と正直に答えます。夏休み明けには『休暇明け』に加え、『残暑』や『秋暑し』などの季語で俳句を作りました。

9月上旬、学校訪問をしていると、校内の環境整備に目が行きました。用務主事さんが、ススキを模したり、月やうさぎを配置したりして、メダカの水槽は季節感で溢れていました。

教室では、先日(9/5)の雷雨から作句に入りました。『雷』や『発雷』『初嵐』は夏の季語、『稲光』は秋の季語。「『雷雨』は直接的に季語で使われることは少ないけれど、体験したことなので、今回は季語扱いにしましょう」などと確認しました。

『初嵐傘を差してもぬれちゃった』

『傘小さい雷雨に見舞われ肩ぬれる』

『背後から突然雷雨追って来る』など、経験したことをそのまま詠み、実感を共有していました。また、被害に遭われた方には申し訳ないけれど、午後の授業がなくなったことを『台風よ五六校時を吹き飛ばせ』と詠んだ子もいました。

その後、「秋の虫」の映像を見たり、季語プリントを参考にしたりして、自由に俳句作りをしました。クラスの最高点句だったのは『秋の山端から少し茜色』でした。

「茜色という言葉からきれいな感じが伝わる」「紅葉していく感じがする」「色の変化が想像できる」等の鑑賞が発表されました。

『この残暑目玉も焼けるアスファルト』も話題になりました。「焼ける目玉は、玉子か、自分の目か」という解釈で盛り上がりました。作者は「自分の目も焼けそうなくらいの熱さを表現したかった」と解説してくれました。

『法師蟬姿はまさに諸行無常』は、「短い蟬の生涯と諸行無常という言葉が重なる」「法師蟬の静かな鳴き声が聞こえてくる」などと鑑賞されました。

友達と違う言葉や発想を楽しみました。

